

# 平成二十一年度事業の概要

## 平成二十一年度「肥後医育塾」年間テーマ「慢性疾患における生活の質(QOL)の向上を目指して」を開催

県民一人ひとりが豊かで健康的な生活を送れることを目指して、「肥後医育振興会(財) 化学及血清療法研究所」および熊本日日新聞社の主催で、平成二十一年度も市民公開セミナー「肥後医育塾」を開催することになりました。「慢性疾患における生活の質(QOL)の向上を目指して」を年間テーマとしました。

慢性の疾患を抱えると日常生活に制約を受けてしまい、肉体的にも精神的にも負担となります。しかし、その中で病気に向き合い、生活の質を高めていくことも必要不可欠です。今期のセミナーでは、緩和ケア、慢性腎臓病、肝臓疾患について考えます。このテーマの下に、三回の公開セミナー(第三十七回から第三十九回)を行う予定にしております。総合司会は私、速藤がつとめることになっております。

このうち、第三十七回は七月十一日(土)に熊本テルサで開催いたしました。テーマは「がんと緩和ケア」といたしました。がんに向き合い、よりよい生活を送るための「緩和ケア」について学ぶ。国が行う緩和医療行政を知るとともに、熊本におけるがん診療連携や病院ホスピス、在宅ホスピスなど熊本の現状についても詳しく専門家の話を伺いました。講演では山本達郎先生(熊本大学大学院医学薬学研究所生体機能制御学分野教授)に座長をお願いいたしました。まず最初に下山直人先生(国立がんセンター中央病院手術・緩和医療部長)から「日本の緩和医療の現状と今後の展望」と題して、平成十九年厚生労働省研究班のもとに、日本における緩和ケアの道筋としてグラッドデザインを作成され、それに基づき、全国がん診療連携拠点病院と緩和医療学会により現在行われている緩和ケア医の育成など、日本の緩和ケアの現状と今後の展望についてわかりやすく講演していただきました。次に、熊本大学医学部附属病院がんセンター緩和ケアチーム・チームリーダーの本間恵子先生に「がん診療連携拠点病院の緩和ケアチームの活動」という演題で講演をいただきました。がんの治療を行う時に、で

きるだけ体とこころの苦痛を取り除くことを目的とした医療チームのがん診療連携拠点病院における緩和ケアチームの活動について詳しくお話いただきました。三人目の講演者は熊本市医師会熊本地域医療センター総合診療部長・麻酔科部長・救急部長の田上正先生から「緩和ケア病棟は今」のご講演をいただきました。がんの治療を目的とした医療ができなくなった患者さん、これからの生活・時間を過ごされる場所について知っていただくことは大切なことであり、その選択肢の一つである緩和ケア病棟での生活をご紹介いただきました。最後には「在宅緩和ケアって何だろう?」と題して、ひまわり在宅クリニック院長の後藤慶次先生のお話を伺いました。たとえ治らない病気になっても、住み慣れた自宅で過ごしたい方の希望をかなえ、自宅でも痛みなどの苦痛を緩和し、自分らしく過ごすことが可能な在宅緩和ケアについて、詳しく解説していただきました。

今後の予定ですが、第三十八回は平成二十一年十一月二十一日に「慢性腎臓病とQOLの向上」。第三十九回は平成二十二年二月十三日に「肝臓疾患について」基礎知識から最新治療まで」と題してセミナーを行う予定です。

常任理事(事業担当) 遠藤 文夫

### 医療健康情報誌

#### 「まいらいふ」の監修

昨年度「まいらいふ」の刷新をいたしましたので、本年度はそれを踏襲していくことになりました。その一方で熊本日日新聞社から読者への情報提供方法の一般的な見直しを行うという方針が出てきました。若い人たちの活字離れ、新聞離れが止まらない中に、昨年のリーマンショックが追い打ちをかけてきたために、全国のマスコミ企業の業績が急速に悪化していることが背景にあります。アメリカでは歴史ある新聞社が次々に廃刊もしくは買収にあつていきますし、ヨーロッパでも販売収入の落ち込みから、街頭で無料で配布することで発行部数を増やして広告収入を高めることで生き残ろうと試みたり、それが失敗して元に戻したりと、悪戦苦闘が続いているようです。

熊本日日新聞社の新方針の一つが、全ての印刷物を自社印刷にすることで経費削減を図るというものです。したがって、少なくとも冊子体の「まいらいふ」は本年度まで終了する可能性が出てきました。もちろん「まいらいふ」事業そのものが終了するわけではありません。タブロイド版などの新聞紙形式であれば、自社印刷で、発行「まいらいふ」と同等もしくはそれ以上の容積の情報紙は制作可能ですので、経費を削減する一方で、内容や情報量はむしろ高めて行きたいというのが熊本日日新聞社の狙いようです。

われわれとしましては、確かに冊子体の「まいらいふ」がなくなることは寂しさを感じますが、熊本県民に正確な医学・医療情報を提供するという大元の目的を最優先しなければならぬと考えています。時代は大きく変わりつつありますので、ある面ではそれに適応しなければなりません。

その方法の一つとして、平成二十年度から取り組んできたホームページの活用が考えられています。紙面とインターネットの両方の媒体を活用しながら、医学・医療情報を提供し続けるという方向性を一層鮮明にしていく必要があるように思います。最新の情報を提供する一方で、その情報は電子サーバーに蓄積され、誰でも必要な時に参照できるようにしておくという狙いです。

いづれにしても、今年度は冊子体の「まいらいふ」が続きますので、その編集と監修をきちんと行いつつ、次年度からの「まいらいふ」事業に関しては熊本日日新聞社と意見の調整を図るという年になってきました。

常任理事(庶務担当) 山本 哲郎

### 二十一年度医学研究会・研修会への助成を行う

平成二十一年度は、熊本大学に在学する教授・学生等が主催する次の六件の学会、研究会、研修会等に助成が決定しています。

- ・ 第十一回人体解剖学実習セミナー・熊本 八月十七日〜二十八日
- ・ 熊大病院群卒後臨床研修プログラム研修医学 九月一日〜三月三十一日
- ・ 第二十五回熊本医学・生物科学国際シンポジウム 十一月十三日
- ・ 本九祭・医学展 十月三十一日〜十一月一日

- ・ 薬学展 十一月三日
- ・ 第十回熊本大学医学部医学科医学教育ワークショップ 日程未定

### 第二十五回熊本医学・生物科学国際シンポジウム開催のご案内

熊本大学大学院医学薬学研究所 病態生化学分野 教授 山縣 和也  
熊本大学大学院医学薬学研究所 分子生理学分野 教授 富澤 一仁

来る平成二十一年十一月十二日〜十三日に熊本全日空ホテルニュースカイ(玉樹の間)におきまして第二十五回熊本医学・生物科学国際シンポジウムを開催する運びとなりました。本年度はメインテーマを「糖尿病研究の最前線―基礎から臨床まで」とし、熊本における糖尿病など代謝疾患の基礎研究・臨床の発展、ならびに若手研究者の育成を目的といたしました講演とポスター発表を予定しております。国内外から糖尿病研究の第一人者をお招きし、ご講演いただく予定であります。海外からは、Graeme I. Bell 先生(シカゴ大学)、Steven Shoelson 先生(ハーバード大学)、Juliana C.N. Chan 先生(香港中文大学)、Yuvai Dor 先生(ハプル大学)、Jorge Ferrer 先生(スエーデン研究所)、Hirotomi Noguchi 先生(ベイヤール研究所)、国内からは、松澤佑次先生(住友病院)、清野進先生(神戸大学)、箕越靖彦先生(生理学研究所)、堀川幸男先生(岐阜大学)、高橋倫子先生(東京大学)にご講演いただく予定です。参加費は無料ですので、皆様方にはぜひご参加賜りますようお願い申し上げます。シンポジウムの詳細につきましては、ホームページをご覧ください。http://kumamoto-physisiology.jp/blog/90807170549.html。最後になりましたが、本シンポジウムの開催にあたり、多大なご支援を賜りました肥後医育振興会の皆様にご心より御礼申し上げます。

### 平成二十一年度(第十四回)医学研究助成を行う

平成二十一年八月二十四日(月)午後六時から平成二十一年度(第十四回)肥後医育振興会医学研究助成金授与候補者並びに平成二十一年度(第十三回)外国人留学生奨学金授与候補者の選考委員会が開催されまし